

近代文学研究叢書

第三十一卷

訂正版

昭和45年3月20日印刷

昭和45年3月30日出版

[¥ 2500]

著者	発行者	印刷者	発行者
昭和女子大学近代文学研究室	東京都世田谷区太子堂一〇七 小林寅次	東京都千代田区神田錦町三丁目一番地 梶原忠幸	東京都世田谷区太子堂一〇七 昭和女子大学近代文化研究所 振替口座東京一七〇八六七 電話(422)五一三一、八番

近代文学研究叢書

第三十一卷

昭和女子大学

近代文学研究室

監

池石石上太岡萩片金河木坂佐佐山島玉辻内成能浜人保本村吉

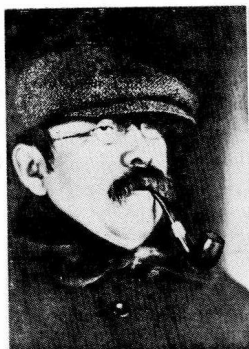
夫孝雄都吉郎賢勝濯鑑助二允友二明郎郎修英二智水生郎吉男貞鑑

口 絵 写 真

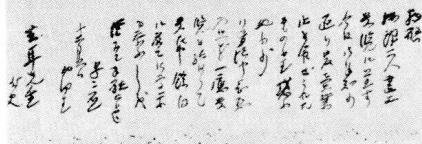
内 村 鑑 三	宇 田 川 文 海	齋 藤 秀 三 郎	ア ー ネ ス ト ・ サ ト ウ	内 田 魯 庵
------------------	-----------------------	-----------------------	---	------------------

内田魯庵

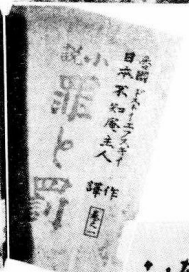
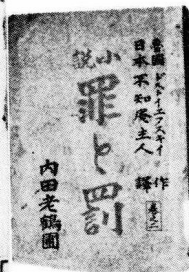
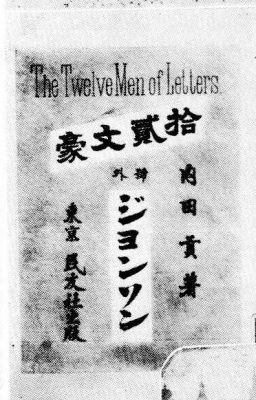
魯庵肖像



多摩霊園にある
魯庵の墓



「ジョンソン」——明治二十七年七月刊（昭和女子大学蔵）



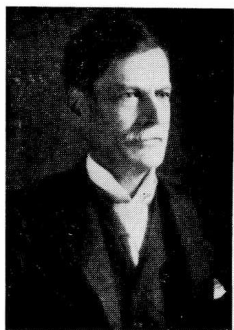
上段右、「きのふけふ」——
大正五年三月刊（昭和
女子大学蔵）
「バクダン」——大正十
一年十一月刊（昭和女子
大学蔵）
「罪と罰」——昭和
二十五年十一月刊、二
月刊（昭和女子大学蔵）



→「社会百面相」——明治三十
五年六月刊（昭和女子大学蔵）
中段左、「文学一斑」——明治
十五年三月刊（昭和女子大学蔵）
上段中、「文学一斑」——明治二
十五年三月刊（昭和女子大学蔵）

アーネスト・サトウ

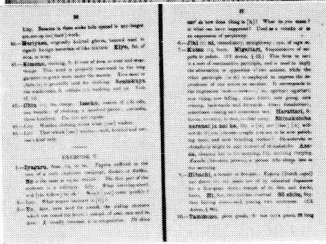
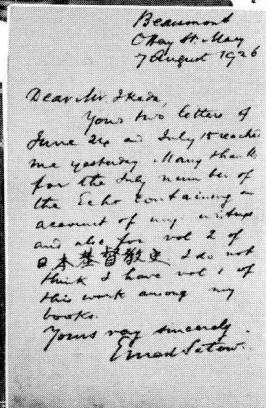
“A Diplomat in Japan” (東洋文庫藏)



アーネスト・サトウの肖像



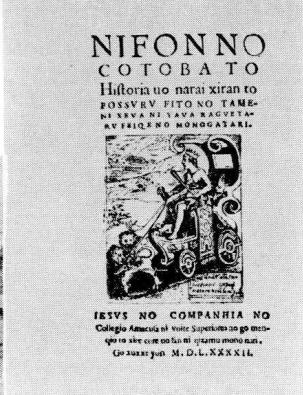
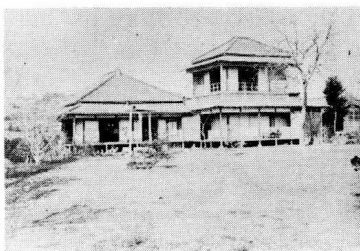
中段右、アーネスト・サトウの書簡
(池田栄三郎氏蔵) ✓



“English Japanese Dictionary”

(東洋文庫蔵)

飯田町六丁目（現富士見町）のサトウの
住んだ家（武田久吉氏蔵）



“The Jesuit Mission Press in Japan”
に紹介した「口訳平家物語」の表紙（東洋文庫蔵）

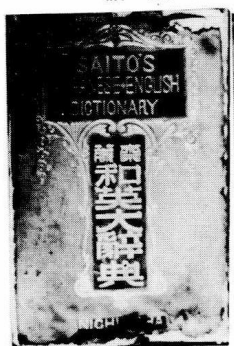
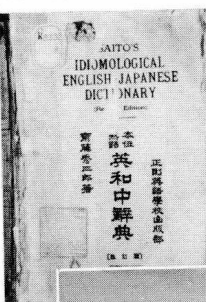
自筆日本文の書簡

「反響」第一卷四号所載
(昭和女子大学蔵)

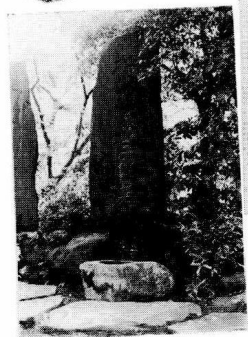
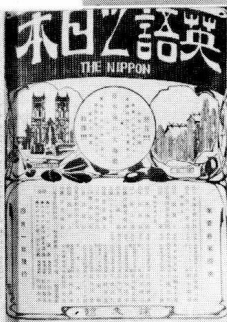
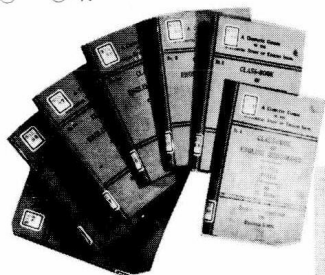
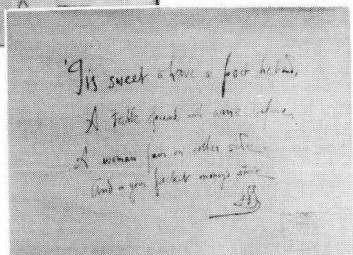
「会話篇」(英文)の本文(東洋文庫蔵)

齋藤秀三郎

秀三郎の肖像

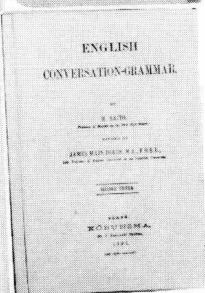
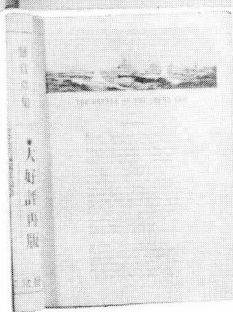


〔熟語本位英和中辞典〕（改訂版）大正十四年刊
〔昭和英大辞典〕（昭和女子大学蔵）
〔藤和英大辞典〕（昭和三年六月刊）
（昭和女子大学蔵）

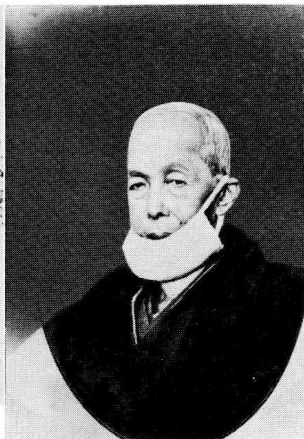
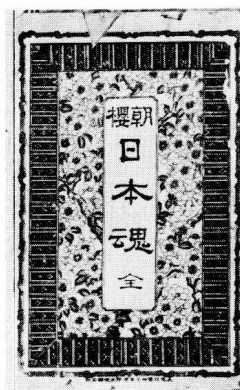


中段左、"Class Book of English Idiomology".
明治三十八年十二月〜四十二年九月刊（昭和女子大学蔵）

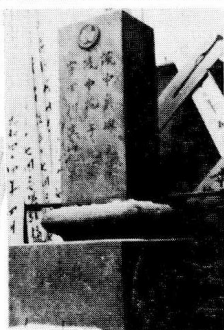
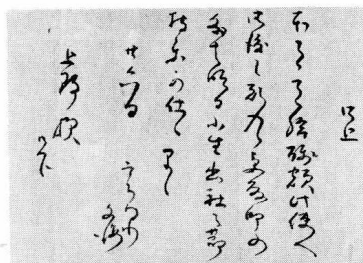
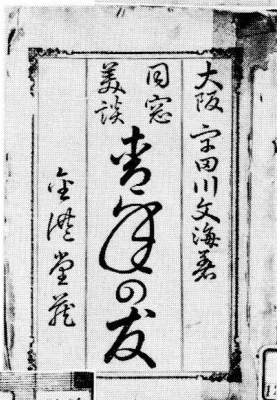
二段右、秀三郎の筆跡
三段右、「スウイントン直訳」氏英語新式
明治十七年刊（昭和女子大学蔵）
下段右、「英会話文法」（再版）
明治二十九年刊（昭和女子大学蔵）
↑多摩墓地にある秀三郎の墓



「英語の日本」一卷四号（明治四十一年四月刊）と同誌所載の英詩「日本海々戦の詩」（昭和女子大学蔵）



上段右、文海肖像
上段中、「櫓の橋」——明治二十二年八月刊
（昭和女子大学蔵）
上段左、「日本魂」——明治十九年四月刊
（昭和女子大学蔵）
中段左、「青年の友」——明治二十年十二月刊
（昭和女子大学蔵）



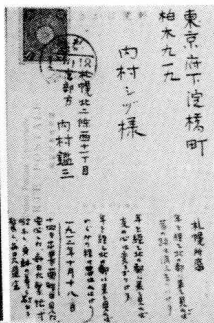
台東区寿町の宗円寺にある文海の墓

「士族之商業」——明治二十二年一月刊
（昭和女子大学蔵）
「夢の手枕」——明治十六年九月刊
（昭和女子大学蔵）

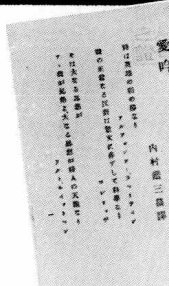
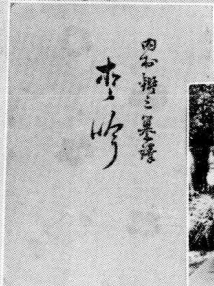
中段右、上野理一宛の手紙
（大阪朝日新聞社蔵）

内村鑑三

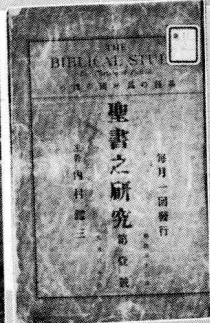
今井館聖書講堂―目黒区中根一の十四の九に所在



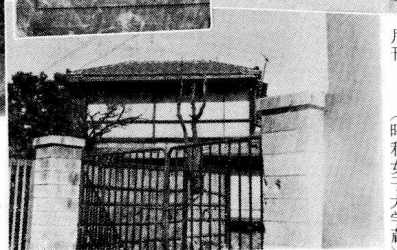
鑑三肖像 (内村家蔵)



上段中、鑑三筆跡 内村シズ宛
ハガキ (内村家蔵)



中段中と左、「愛吟」―明治四十四年四月刊
(昭和女子大学蔵)



↑鑑三が創刊した雑誌「東京
独立雑誌」―明治三十一年六
月刊 (昭和女子大学蔵)

↑鑑三旧居跡碑 高崎市柳川町
十一番地にある

鑑三終焉の柏木荘 (葉山町堀内七七一) →
鑑三が主幹した「聖書之研究」一明治三
十三年九月の創刊号 (昭和女子大学蔵)

目次

口	第三十一卷の成立	昭和女子大学近代文学研究室：(二〇)
凡	例	昭和女子大学編集室：(二五)
内	田 魯 庵	近代文学研究室：(二七)
ア	ーネスト・サトウ	近代文学研究室：(二七)
齋	藤 秀 三 郎	近代文学研究室：(二五)
宇	田 川 文 海	近代文学研究室：(三一)
内	村 鑑 三	近代文学研究室：(二七)
近	代 文 芸 年 表 (3)	近代文学研究室：(四〇)
卷	末 付 記	近代文学研究双書編集室：(四三)

第三十一卷の成立

本巻は、昭和期第六として、昭和四年六月から五年三月までに没した左記五名の研究調査を収めた。

魯庵内田貢は慶応四年（一八六〇）四月五日江戸下谷車坂三軒町に、代々御家人を継ぐ父鉦太郎、母りうの長男として生まれた。明治十四年中村正直の同人社に入社、ついで立教学校に入り英語を学んだ。大学予備門を経て、東京専門学校（早稲田大学）英文科に編入。明治二十一年山田美妙の「夏木立」に感激、美妙に送った「山田美妙斎大人の小説」が「女学雑誌」に掲載されこれが縁で同社の社員となり、文芸評論家として文壇に登場した。やがて尾崎紅葉、二葉亭四迷をしり、文学の価値を学んだ。二十三年「国民新聞」に入社、石橋忍月、森鷗外、斎藤緑雨、森田思軒らと交わり、植村正久の勧めによりトルストイの論文を渉獵した。「女学雑誌」「国民之友」に当時の作品や作家を批評し、二十六年の「国民之友」には「今日の小説及び小説家」を論じ、文壇に警告を発した。又外国文学を紹介して日本文壇に刺激と反省を与えて、文芸評論家としての地位を確立した。ドストエフスキーの「罪と罰」を読み大いに感動、二十五年「罪と罰」を翻訳して好評を得た。以後「凄涯」「めをと」「イワンの馬鹿」「復活」などロシア文学をはじめ外国文学を翻訳紹介した。一方、三十一年小説「暮の廿八日」を「新著月刊」に発表、ついで「破垣」「社会百面相」を執筆、流動する社会と人間を

克明に描いて文壇の論をよんだ。三十一年七月学友布施謙太郎の妹よしと結婚。三十四年「学燈」の編集顧問となり、以後三十有余年勤続、外国図書の紹介につとめた。大正五年「きのふけふ」(のち「思ひ出す人々」と増訂改題)を出版、四十年にわたる自らの文壇生活に交わった人々の態度や思想行動を記して、明治の文学、文化史を伝える貴重な史料を残した。昭和四年(一九二九)六月二十九日、代々木八幡町で逝去。六十一歳。

アーネスト・メイスン・サトウは一八四三年(天保十四)六月三十日、ロンドン市内北東部クラブトンに生まれた。スエーデン人の父、ハンス・ディビド・クリストファーとイギリス人の母の十一人兄弟中四男であった。十六歳の時ロンドンのユニバーシティ・カレッジに入学。一八六三年(文久三)九月、日本在勤領事館付通訳生として来日。直ちに米人宣教師ブラウンより日本語を、日本語教師高岡要より書簡文を学んだ。薩英戦争、下関戦争に従軍、尊王攘夷運動、倒幕維新など、日本史上の大事件が外国の勢力と相交錯しながら展開する中を、通訳官として縦横に活躍した。やがて書記官へと進み、尊王倒幕派の主要人物と交渉を持つようになり、後日薩長と英国との協調を約するよう任を果し、我国の情勢の推移に常に接解していった。彼の唯一の邦文著書「英国策論」には条約改正や日本政府の組織改造を大胆に述べて独自の政治論を発表した。のちシャム、ウルフワイ、モロッコの駐割公使を歴任後日本駐割公使になり、日英友好の強化につとめ、日英同盟締結の陰の役割を果たした。その後支那駐割公使を経て帰英、枢密顧問官となった。当時の英国の極東政策の有力な指導外交官としてその任を全うしたばかりでなく、日本研究においてもすぐれた学者であった。すなわち日本文化につ

いて、地理歴史、風俗習慣、宗教の多方面を研究しその著述を残して、ラフカディオ・ハーン以前に日本文化を海外に紹介したものとしても注目される。特に一八八八年（明治二二）の「日本耶蘇会刊行書誌」は日本のキリスト教史、国語史、さらに文化史上に貴重な資料を提供して高く評価されている。一九二九年（昭和四）八月二十六日、八十六歳で独身の生涯を閉じた。

斎藤秀三郎は仙台藩士斎藤永頼の長男として慶応二年（一八六〇）一月二日仙台市堤通に生まれた。明治四年藩校の辛未館に入学、英語力が抜群であった。その後宮城英語学校、東京大学予備門を経て東京工部大学校に入学、教師J・M・ディクソンに師事して、将来の英文法学者たる大きな要因になった。仙台に帰り私塾の英語学校を設立して英語教育に専心、二十一年五月、前島美孝長女とらと結婚。同年岐阜中学校教諭となる。同校在職中、多くの外国の書物を読破し、英文法研究に没頭。二十六年第一高等学校講師のかたわら「英会話文法」を出版、中等学校の英語教育方法に英会話をを用いることを強調した。二十九年神田区錦町に正則英語学校を創立、同人社流の変則的な、すなわち訳読的な教授法と異なり、リーディングによりすぐ意味を解する教授法を志した。三十八年から四十年にかけて生徒数五千人を数え隆盛を来した。その間次々と新著を世に送り「実用英語文典」には、実用的な慣用語句を取り入れ、適切な文例と豊富な問題とわかりやすい説明を施し「英文法精義」は英語の科学的研究を試みその研究の集大成である「英和中辞典」（大四）昭和三年の「和英大辞典」は世に広く行われた。かくして日本における英文法研究を体系的な研究におし進めて英語教育界に大き

く貢献したのである。彼の文法は文法そのものに徹底することなく、ディクソンの影響によるイデオロギーの追求がなされているところに特色があり、日本語を基礎にした英語研究の一方向を示した。昭和四年（一九二九）十一月九日、直腸癌のため六十三歳で没した。

宇田川文海は嘉永元年（一八四八）二月二十四日、江戸本郷新町に伊勢屋市兵衛の三男として生まれた。長じて駒込白華山養源寺に入門した。安政六年（一八五九）得度して法名を恵海と称し、読書三昧の日を送り、佛書その他に「武辺咄聞書」を読んで感激した。明治維新後生活が困難になるに及んで寺を去り、次兄茂中貞次の活版所で働いた。明治六年秋田県庁の印刷職工長と「遐邇新聞」の主筆となる。ついで「神戸新聞」の記者になり、大阪で「浪華新聞」を発行、七年に「大阪日日新聞」（のち「大阪新聞」と改題）や「大阪日報」に執筆。明治十三年八月、津田聿水の絵入通俗「魁新報」記者として、小宮山天香、半井桃水らと共に迎えられた。十四年「大阪朝日新聞」に入社、以後二十二年退社まで、岡野半牧と共に新聞小説家として文筆を振った。彼の作品は実録風な勧懲思想をふまえた仇討物、お家騒動物が主でその他人情物、世話物などがある。仇討物「北国檐乃橋」、お家騒動物「勤王巷説「葉松」は彼の代表作で、すぐれた構想をもち劇化上演され、世人に好評を博した。一方シェイクスピアの「ベニスの商人」を翻案して「何様彼様銭世中」を発表、「ロミオとジュリエット」の翻案「悪因縁」と共に世評高く、くりかえし上演された。明治二十三年「大阪毎日新聞」に移り、三十一年頃まで約四十一篇の連載小説を書き読けた。晩年、「契沖阿闍梨」、「將門」、「豊臣秀次」を執筆、戯作物から史実物

に活路を見出そうとした。昭和五年（一九三〇）一月六日、大阪市住吉区上住吉の自宅で没した。享年八十二歳。

内村鑑三は文久元年（一八六〇）三月二十三日父金之丞宣之の長男として、江戸小石川鳶坂上、松平右京亮大河内輝声の邸内に生まれた。英語塾有馬学校に入塾後、東京外国語学校に編入、明治十年太田稻蔵（新渡戸）、宮部金吾らと共に札幌農学校に入る。やがてキリスト教に入信十八歳の時洗礼を受く。十五年同志らと札幌独立教会設立。十七年浅野タケと結婚したが離婚し米国に留学。十八年マサチューセッツ州アーマスト大学に入学、同学長シーリーの感化で信仰における回心を経験。二十一年帰国後北越学館に教鞭をとる。二十三年横浜加寿子と結婚。同年第一高等中学校嘱託教員となり、翌年一月、「不敬事件」を契機に明治思想史上に残る論戦が展開された。宗教体験記「求安録」、「How I Became A Christian」を著わし後者は各国訳で人々に読まれた。明治二十八年「国民之友」に「何故に大文学は出でざる乎」を執筆、宗教的倫理観をもって当時の文学を批判。三十年訳詩集「愛吟」を出版、又英国の自然詩人ホイットマンを紹介した。三十年「万朝報」に入社、翌年「東京独立雑誌」創刊し腐敗した社会、政治を指摘し改革を訴え宗教を論じた。三十三年「聖書之研究」創刊、以後没するまで聖書の福音を説く。日露戦争後は非戦論者となり、多く反戦論を発表。一方、各地に理想団を結成、聖書研究会を開き、又再臨運動を展開し無教会主義を唱えるなどキリスト教界に独自の位置を占めた。昭和五年（一九三〇）三月二十八日、七十歳の生涯を終えた。

（昭和女子大学近代文学研究室）

凡 例

一、研究調査に着手してから本叢書刊行に至るまで、凡そ二十二年を要しているので、指導者中で岡田哲藏、福井久藏、池田龜鑑、金子健二の四先生はすでに鬼籍に入り、研究担当者中にも病でたおれたものが数名ある。本叢書をこれらの人々に見てもらったならばさそよろこび下さるであらう。謹んで霊前に献上する。

二、本叢書は卒業期に近い学徒の中から担当者を選び、調査研究の範囲、方法、次第などを相談して、先ず第一に業績の検討に着手した。不明、疑問、困難、迷路などにつき当りつつ一年ぐらいするうちに明瞭になるので、次の年から生涯と遺跡を究めてからいよいよ論文作成にとりかかった。このとき、材料の批判、整理、布置、論文の構成などについて相談しながら脱稿に至る。ついで修訂、校閲を経てから編集という順で、その間約二カ年が費される。

三、収録事項の研究に対し、直接間接に協力した学徒は延三千名に上るが、その協力と、歳月の恩恵に加うるに学界、文壇、教育界、操觚界など各界先輩の懇切な教示と、遺族及び関係者の好意を感謝する。

四、年表で著作というのは、発表が生前と死後とを問わずその作者の作品のすべてを指し、資料とは、第三者の考説、論評、感想等の文献を指すのである。従って死後刊行された全集物や編集物は著作年表に、第三者の解題や解説の如きは資料年表の中に収めた。又、単行本の中での編集物は、所要の小題を書題名欄に、書名